

L
e
t
t
e
r

P
l
a
n
e
t

翠月
瞳

登場人物

女

男

郵便屋さん

・手紙⇨舞台・音楽・絵画など様々な芸術。手紙が届かない絶望や葛藤は、コロナ禍における芸術活動の様子に思いを馳せています。届かなくてももう一度手紙を書いてみようとする「女」の挑戦は、上演できなくてももう一度舞台を作ろうという苦しい中での挑戦を意味します。この作品が、僅かでも皆さまの希望となりますように。

Opening

♪ [Instrumental beat 1]

郵便屋さん、舞台上に堂々と現れる。

【郵便屋さん】

『(Rap) 2021「Letter Planet」In the house!』

今日は Not PCR! Not distance! Not bad feeling!

だってこれは この惑星の話じゃない

どこかのだれかの

だれでもないあなたのお話』

女・男ここまで舞台上に現れる。

【女】

『(Rap) 現代 まだ見ぬ あなた

千回 愛を問うてみても ない応答

物語は私から始まる冒頭』

【男】

『(Rap) やることもなく 宇宙と交信』

なんか聞こえたふり 強引？

今日も布団の外へ going

試みては あれれ？ 夢に throw in』

【郵便屋さん】

『(Rap) どれくらい経ったのか』

繰り返している この世の中の禍』

人生は止まり果て 僕は困り果て を繰り返して』

今日も終わり出します』

【女】

『(Rap) もう1年は過ぎちゃったよ、約』

【男】

『(Rap) あの星に向かってぼんやり眩く』

女「……………お手紙、届きましたか」

↪fade out

Scene① Refrain of raindrop

女、手紙を書こうとしている。

女「だいぶ長い間、手紙を書いています。時間もお金も底つきました。ああ！聞かないでください、そのことだけは。夢なんて忘れてるんですから。忘れるようにしてるんですから。……………それはそうと、手紙の返事は一向に来ません。届いているのかも怪しくなってきました。大事な手紙なんです。私の一生が懸かっているとんでもない言ではないんです。たかだ手紙で、ヒステリックな女だ？何その言い方！地球じゃあるまいし。こないだの手紙だって、もう最後のように思ったくらい丁寧に書いたんですから、そう何度も書き直せ

ないですよ。第一、言いましたよね。時間も、お金も、使い果たしてしまっただんですから」

男、何かの端末や本などを見ている。

男「だいぶ長い間、手紙を待っています。時間も情熱も底つきました。ああ！ 聞かないでください。そのことだけは。孤独なんて忘れてるんですから。忘れるようにしてるんですから……それはそうと、手紙は一向に届きません。きっと僕のことなんて忘れてるんだあ。手紙書くなんて、嘘だったんだあ。いつそのこと、僕から手紙を出してみようかな。ううん、でもそんなこと僕にはできない……男らしく自分から送れよと人は言いますが、男らしくって、なんですか！？ 地球じゃあるまいし。勇氣には限りがあるんですから、そう簡単に本音なんて伝えられませんよ。第一、言いましたよね。時間も、情熱も、使い果たしてしまっただんですから」

雨音。と共に、ラジオやテレビの中から臙に聞こえるような、ノイズ混じりのピアノの音が遠くから聞こえる。

♪ [piano theme 1]

女・男「あ、雨」

二人とも窓を見つめている様子で、

二人「あの雨だれが石を穿つなんて」

女「そんなざれごと」

男「たわけたこと」

女「二人の雫は一つにならない」

男「一つの命は一人で賄い」

女「雨は漂う」

男「文字は漂う」

二人「手紙は宇宙のどこか彼方へ」

女「私は宿そう」

男「僕は辿ろう」

二人「手紙は心のどこか彼方へ」

女「世界は流転」

男「宇宙は無限」

女「でも私たちひとりぼっち」

男「世界は流転」

女「宇宙は無限」

男「だから僕たちひとりぼっち」

女「交われたならば 光を帯びて」

男「星より ずっと高く 輝いて」

女「鎮座するはカミの（上の・神の・紙の）てっぺん」

男「この惑星から謁見」

女「手紙を書くには」

男「手紙を待つには」

女「愛が必要」

男「相手が必要」

女「相も変わらず真っ白な私は」

↪fade out

女、紙を捨てて去る。

男、待ちくたびれてどこかへ行ってしまおう。

Scene② Post boys&girls

郵便屋さん、いつものごとく堂々と現れる。

郵便屋さん「どうも、こんちゃ！ 悠々自適なゆうゆう郵便屋さんです！ あ、そう見えないっすか？ どっちが？ 悠々自適の方？ それともゆうゆうの方？ それとも郵便屋さんの方？ あ、郵便屋さんの方……それもそのはず。俺は、ラッパーになるという夢を諦めて郵便屋さんになりました！ deen。メッセージを届けるという点では一緒かなーって。ハイ、書きます送ります届けます。書きます送ります届けます。ハイ書きます送ります届け……え？ 届きませんでした？ あー。届きませんでした2021。(ニイマルニイイチ) ハイ！ 書きます！ 送ります！ 届けます！ ミス！ 娘さんには申し訳ないんですがあ、メス！（突然のオペ）先生、娘の手紙は届くんでしょうか……んん。もーすぐ届くと思いますよ。多分」

女、手紙を読みながら現れる。

女「拝啓。彼方のあなた。今年も、早くも半分が過ぎようとしています。すが、いかがお過ごしでしょうか。今日は久しぶりの青空です……ダメだ。やっぱり最初の手紙が一番よかった。春一番が吹いたあの日の。爽やかな匂いのする若い便箋はもう手に入らないし、青空が見えたのもほんの一瞬。嘘つきの手紙なんて誰も欲しくない。私は本当のことを書きたいの。正真正銘の手紙を」

女、電話帳を開き郵便屋さんに電話をかける。

郵便屋さん「はい。こんちゃ！お電話ありがとうございます。こんちゃ！」

女「あ、悠々自適のゆうゆう郵便屋さんですか？」

郵便屋さん「そっすよー」

女「すみません。手紙について伺いたいですけど」

郵便屋さん「手紙以外でもいっすよー。郵便屋さんだけど」

女「えっ。例えば？」

郵便屋さん「毛ガニ」

女「手紙？」

郵便屋さん「ううん。毛ガニ」

女「すみません。手紙のこと聞いていいですか」

郵便屋さん「かもんめーん」

女「だいぶ前に出した手紙なんですけど。届いているか確認したくて」

郵便屋さん「あっ、わかりました。いつ頃のですか？」

女「去年の春くらい」

郵便屋さん「宛先は？惑星内？惑星外？」

女「惑星外です。シラハミガサンケワガナカ」

郵便屋さん「お客様のお名前頂けますか？」

女「私です」

郵便屋さん「確認しますねお待ちください」

郵便屋さん、保留音を歌う。(♪お風呂が沸きました)

郵便屋さん「あゝ！（お風呂が沸いたと同時に）」

女「どうしたんですか」

郵便屋さん「ううん、うん、ううん、うん、ううん、うん、うん……」

女「なんです」

郵便屋さん「大変申し訳ございませんお客様。当局で何らかの障害が発生しており昨年度からの526通のお手紙が、全て届いていない状態となっております」

女「へ？」

郵便屋さん「私共とも致しましてこれは自然災害と言うほかないと言いますか」

女「ええ、そんな……どうしてくれるんですか！」

郵便屋さん「どうも、どうにも、できない状態です」

女「そんなのってないじゃないですか！ こっちは人生懸けて、命張って、恥ずかしい言葉だって、勇気を出して……それをそんな一言で」

郵便屋さん「命まで……大変申し訳ありません」

女「じゃ、ど、どうしろって言うんですか」

郵便屋さん「誰にも、どうにもできないんです」

電話が切れる。

女「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ！こんな嘘だ！何か方法はあるはずなのに。ああ、何か、手紙よりもいい、いい方法が……ああ！ インターネットが発展したってなんだよこのザマ。味気ない画面が何を語る？ 手紙じゃなくちゃダメなんだ。手紙がいいんだ。あの人だつて、手紙を待ってるんだ」

女、半ば投げやりになって手紙を書こうとする。

女「……無駄なこと？また時間とお金がなくなるだけのこと？」

女「一体何のために、私は書き続けているのだろう」

♪ [piano theme 2]

女「地球には、ゲイジュツつてものがあるらしい。それは、報われても、そうでなくても営まれ続けるものらしい。一体、何のために？私はいこうして報われなくても、紙になんやら書き続ける。これは、ゲイ

ジユツ？」

男「ゲイジユツ。それを知りたくて地球旅行に行ったとき、僕は初めて『劇場』という場所を訪れた。全身がむき出しになったみたい、凄いの電波を受けた。第六感なんて地球にはないはずなのに、僕は地球の人らにそれを刺激されたんだ。ゲイジユツが何かなんて、どうでもよくなった」

女「これが何かわからなくなってしまったからには、私には手紙を書く資格はないのだろう」

男「そう……理由なんて、時にどうでもいいんだ。僕は今それを思い出した。情熱に理由なんてなくてもいいんだ。あの人に、伝えなくちゃ」

女「もう手紙を書くのはやめよう」

男「伝えなくちゃ、僕が。(バカ・デカ・ボイスで)おーーーーい!!!!

おーーーーい!!!! おーーーーい!!!!

い!!!!!! ハア……」

♪[boys and girls theme]

女、気が付かない。

男、叫ぶ・ため息をつくを繰り返す。

↪fade out

Scene③ Posting spotting rap

郵便屋さんによる下手くそなボイスパーカッションが暗闇から聞こえる。

郵便屋さん、ノリノリでやって来る。

郵便屋さん

『手紙？ 毛ガニ？』

何だろうとこなすぜ郵便屋さん

地球みたいに色褪せた世界

困りあぐねた 俺らの世代

マインドだけは色褪せない

きつとこんな毎日がかけがえない

郵便障害の知れない得_レ体

不_レ穏な気配は隠_レせまい

でも宛先照準定めた狙_レい

律儀に韻踏み届ける手紙

えい』

どこからともなくまばらな拍手。

郵便屋さん「自分のせいではないとは言え、落ち込むんだよなあお客
様対応」

郵便屋さん「向いてないのかなあ郵便屋さん」

郵便屋さん、遠くを見つめて

郵便屋さん「遠くに行きたいなあ。地球とか」

郵便屋さん「地球には、めちゃくちゃな数のラッパーがいるらしい。

この星じゃラッパはスカートを履くつていうのがマストだけど、あっちだともう人が何人入れるんですかってくらいだぶだぶのズボン履いて、首とか腕にやたらと絵を描いて、髪の毛はこう、洗えないように、頭皮にこうやって縫い付けたり（ドレットを表現）、伝統芸能を受け継いで常に低重心で音楽に乗ってる。よく捕まるのも、マストらしい」

真顔から突然身をくねらせ、

郵便屋さん「かけえ〜〜〜〜〜」

郵便屋さん「郵便屋さん、やめてえ〜〜〜〜〜」

遠くから男の叫び声が聞こえる。

郵便屋さん「え、なにになになに」

男「おーーーーーい!!!!!!!!!!!!!!」

郵便屋さん「今行くぜ!!!!!! 待ってろマイメーローン!!!!!!
メインメーローンメーローン.....」

郵便屋さん、走り去る。

Scene④ Strain of Raindrop

女の元に、郵便さんの決意の叫びが届く。

女「えっ。何今の声」

男「.....から.....!!!!!!」

女「ん？また聞こえる」

男「待ってるから.....!!!!!!」

女「あれ、この声.....!」

男「僕は！君からの手紙を待ってる！この時間が何にならなく
てもいい！情熱が熱さを失ってしまってもいい！それでも、待
っていたんだ.....!」

女、立ち上がる。ここからバカ・デカ・ボイスでの会話が始まる。

女「……………いつになるか、わからない……………」

男、声が届いたことに反応する。

男「そんなの、かまわない!!!!!!」

女、ほとんど泣きそうになりながら

女「かまわくない……………」

男「かまわない……………」

女「もう何を書けばいいかもわからないの……………」

男「なんだっていい……………」

女、ハッとすする。

二人の感覚通信器官が通じ合い、いつの間にかバカ・デカ・ボイスな

しでも会話ができるようになっていく。

男「なんだっていいんだ、いつだっていいんだ」

女「そんな、地球みたいなきれいな世界をよめてよ」

男「届かなくなっちゃっていいんだ」

女「なんでそんなこと言うの」

男「だって、僕が待ってるから」

クラッカーのような明るい破裂音。

雨や星に混ざって何通もの届かなかった手紙が降ってくる。

♪[instrumental beat 2]

二人「あの雨だれが石を穿つなんて」

女「そんなざれごと」

男「たわけたこと」

女「二人の雫は一つにならない」

男「一つの命は一人で賄い」

女「雨は漂う」

男「文字は漂う」

二人「手紙は宇宙のどこか彼方へ」

女「私は宿そう」

男「僕は辿ろう」

二人「手紙は心のどこか彼方へ」

女「世界は流転」

男「宇宙は無限」

女「でも私たちひとりぼっち」

男「世界は流転」

女「宇宙は無限」

男「だから僕たちひとりぼっち」

女「交われたならば 光を帯びて」

男「星より ずっと高く 輝いて」

女「鎮座するはカミの（上の・神の・紙の）てっぺん」

男「この惑星から謁見」

女「手紙を書くには」

男「手紙を待つには」

女「愛が必要」

男「相手が必要」

女「相も変わらず真っ白な私は」

♀out

女、降ってきた手紙に混ざっていた白紙の便箋を拾い、

女「また懲りもせずに手紙を書く」

女、手紙を書き始める。

暗転

Curtain Call

♀[Instrumental beat 1 (Remex)]

終